

大学生サークルの設立と地域連携による棚田保全方策

Rice terrace preservation policy by establishment and regional cooperation of a college student circle

○中里良一*・中村好男**

NAKAZATO Ryoichi, NAKAMURA Yoshio

1. はじめに

現在多くの地域で棚田保全活動が行われているが、いずれの地域においても農作業等の労働力の安定的かつ継続的な確保が大きな課題となっている。このような課題解決のためには、大学生が関与することが有効であると考えられる。そこで、本稿では、筆者が設立に関与した大学生サークルの静岡大学研究会の設立と連携という手法による、静岡県菊川市上倉沢地区の棚田保全方策及びその有効性について報告する。

2. 静岡県菊川市の棚田保全活動の展開

静岡県菊川市北東部に位置する上倉沢地区(Fig.1)には、戦国時代から江戸時代初期にかけて開発された千枚棚田が造成され、かつては約10ha(約3,000枚)の水田で耕作されていた。しかし、耕作放棄によって現在では1haの水田を残すのみとなっている。そうした中で、上倉沢地区では1994年に棚田保全の任意組織「千枚田を考える会」が設立された。その後、1999年に当地の棚田が県の「棚田等十選」に認定されたことを契機に、1998年に「上倉沢棚田保全推進委員会」に改称され、棚田の現状維持に加え、耕作放棄地の解消による棚田の復元に取り組んできた。しかし、地元の会員が高齢化してきていることから、それまでの活動体制による棚田保全の持続に懸念を持っていた。そこで、2010年にNPO法人「せんがまち棚田倶楽部」が設立されることになった。現在の棚田保全活動は上倉沢地区の有志10数名によって取り組まれているが、メンバーだけで全ての農作業を実施するのは困難であり、安定した農作業支援の確保が急務となっていた。

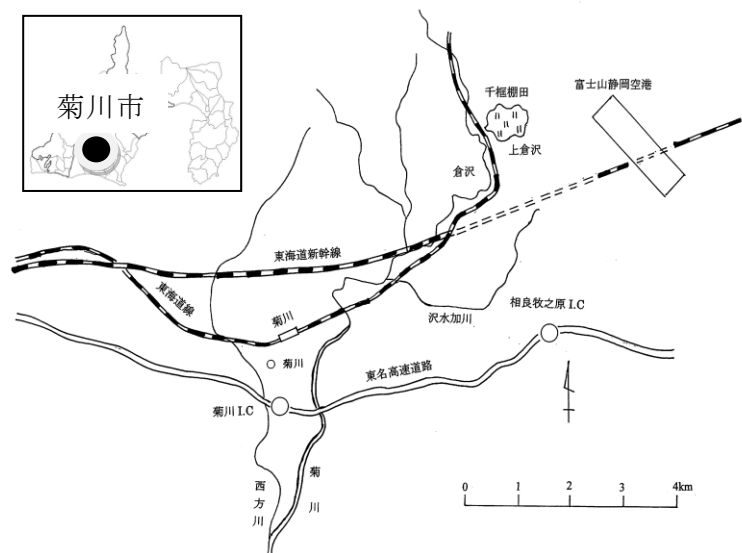


Fig.1 上倉沢地区の棚田位置図

しかし、地元の会員が高齢化してきていることから、それまでの活動体制による棚田保全の持続に懸念を持っていた。そこで、2010年にNPO法人「せんがまち棚田倶楽部」が設立されることになった。現在の棚田保全活動は上倉沢地区の有志10数名によって取り組まれているが、メンバーだけで全ての農作業を実施するのは困難であり、安定した農作業支援の確保が急務となっていた。

3. 棚田保全に関わる大学生の関与の可能性

大学生サークルは、共通の目標を持ち、その目標を達成するために様々な活動を行うことができることから、参加すれば、楽しさ、知識、経験、友人等を得ることができる。このようなことから、大学生が行動を起こしやすききっかけとして、サークルという枠組みを用意

* 北陸農政局 Hokuriku Agricultural Administration Office

** 東京農業大学地域環境科学部 Tokyo University of Agriculture, Faculty of Regional Environment Science

キーワード：棚田保全 学生サークル 農業支援 大学地域間連携 棚田市場

することが有効であり、この手法によって大学生を継続的に棚田保全活動に関与させることが可能であると考えた。しかし、近隣の大学に棚田保全を活動目標とした学生サークルが見当たらなかったことから、「せんがまち棚田倶楽部」が静岡大学と相談の上、学生にサークルの設立と参加を呼びかけた。

4. 静岡大学棚田研究会の設立と活動内容

静岡大学の学生サークルのメンバーについては、大学の掲示板にポスターを掲示させていただき募集を行った。その結果、数名の学生が応募してきたので、2009年に棚田研究会を設立することになった。設立時のメンバーは3名であったが、現在では30名に増加している。研究会の主な活動は以下のとおりである。

- ① 農作業支援
- ② 棚田の復活の作業支援
- ③ 「棚田オーナー事業」のインストラクター
- ④ 農産物加工品の開発、販売
（「棚田市場」の開催）
- ⑤ 自前の農園の開墾、整備、栽培



Fig.2 学生による農業支援



Fig.3 学生による棚田市場

5. 棚田保全活動の取組みの効果

(1) 農家および農村地域への効果

農家は、研究会の学生から農作業支援（Fig.2）を受けることにより、労務の負担軽減が図られる。また、必要な作業人数が部員の数だけでは足りない場合でも、部員がサークル外の一般学生に呼びかけ必要な作業人数を確保するので、計画的に労務を確保できる。これまでの活動を通じて大学生サークルから安定的に労務支援が期待できる感触を得たこと、大学生サークルとの連携を通じて農家自身棚田保全活動へのモチベーションが上がったことなどにより700㎡の棚田を復元させることができた。一方、多数の大学生が農作業やお祭り、各種のイベントなどで地域内に入ることにより、農村地域に活力がもたらされている。

さらに、大学生が尊敬の念を持って農家に接するとともに、景観など地域の素晴らしさを称賛することにより、農家は農業や住んでいる農村地域に誇りを持つことができる。特に高齢者は、若者と積極的にコミュニケーションを図ることに生きがいを見出している。また、若者の農業、農村への理解が進むことにより、嫁問題の解決も期待されている。

(2) 学生の効果

研究会の学生は、農業を体験しながら農産物加工品の開発や販売（Fig.3）を実践し、農家の人の話を聞き、様々な社会人のアドバイスを受けることにより、大学の講義や研究の意味が実感として理解でき、農業農村に関する興味や知識、探究心等が深まっている。このことが影響してか、サークルに入会后、理学部から農学部へ転学部をする学生もいるほどである。

6. おわりに

大学生サークルの部員は卒業後、棚田保全活動へのかかわりがなくなる者も少なくはない。そこで、静岡大学棚田研究会では、卒業後も棚田保全活動にかかわれるようOB会組織を設立した。この組織のメンバーは、大学生サークルのOBだけではなく、就職先などで新たに知り合った先輩、同僚、部下、知人、友人等の参加も可能とする。これは、棚田保全活動に興味がある者を卒業を機に減らすのではなく、増やすねらいである。

以上、今回報告した方策を参考にいただき、全国の多くの棚田が保全されることを期待するものである。